

京都大学	博士（教育学）	氏名	不破 早央里
論文題目	箱庭療法における主観的体験と治癒的要因に関する研究 — 力動、連続性、プロセスの視点から —		
（論文内容の要旨） 箱庭療法は、Kalff, D. M.が Jung の分析心理学の理論を適用し、確立した心理療法である。心理臨床領域のみならず福祉・教育などの様々な領域で用いられている。本論文では、制作者の主観的体験と箱庭療法の治癒的要因を検討した。特に、本論文では、制作者の主観的体験の中での「力動」と、力動に時間的な過程を付加した「プロセス」と「連続性」の3点に着目し、制作者の主観的体験を明らかにし、治癒的要因との関連を論じることで、箱庭療法の治癒的要因に示唆を得ることを目的としている。 第1章では、箱庭療法の先行研究を概観し、調査研究の課題を明らかにした。その結果、連続性と自我違和性などの力動が課題として抽出された。これらの課題を明らかにすることは箱庭療法の治癒的要因に示唆が得られると考えられた。まずは、1回の箱庭の関係性の中での力動を明らかにした上で、複数回の制作時の変化を検討していくこととされた。 第2章では、大学生・大学院生 60 人に 1 回の箱庭制作における制作者と箱庭イメージの関係性を質問紙で測定し、インタビューを行う調査を行った。因子分析の結果、作成された質問紙「自我と箱庭イメージの関係性尺度」から「親和性」と「異質性」の2因子が抽出された。アイテムを主とした展開がある時に、特に箱庭が自我とは異質だと捉えられやすいことが明らかになった。「親和性」は、制作者が箱庭の中にいると体験される、日常に関する語りが見られる等、箱庭との距離の近さが示された。 第3章では、箱庭療法の場合において制作者が持ちうる関係性と力動について検討された。イメージ体験を含めると、箱庭の体験のされ方は制作者にとって距離感・存在感ともに様々であり、多様な体験がされることが推測された。 第4章、第5章、第6章では、大学生・大学院生 30 名に、3 回の箱庭制作を行い、質問紙とインタビューを行う調査研究を実施した。「制作者の自我と箱庭イメージの関係性尺度」の尺度得点の変化の分析と語りの分析の結果、1・2 回目で親和性得点が高く異質性得点が高いが 3 回目は両得点が平均程度で、2 回目から 3 回目にかけて 73.3%が箱庭との距離が「離れた」と述べた「離れ変化群」、1・2 回目で異質性得点が高く親和性得点が高いが、3 回目に異質性得点が低く親和性得点が高くなる「自分変化群」、1・2・3 回目を通じて異質性得点が高く親和性得点が高い「異質維			

持群」の3群が抽出された。第5章では、より多角的に検討するために、SD法の印象評定と事例検討から、3群の主観的な体験について検討した。また、3回を通じた分析の結果、2回目では1回目の箱庭と同じものを作りたくないという気持ちや気が楽になったという制作者の主観的な変化が制作に影響を与えていた。3回目では、半数以上の制作者がイメージを決めてから制作し始めるなど、イメージの体験に違いが見られた。また、自我異質的でない箱庭を作る時、制作者には意識で捉えやすい箱庭からのフィードバックが起きることが示された。

第7章では、分析心理学のイメージ体験による異質な自分との出会いについてその意義を論じることで、箱庭を制作する中で自我と異質な箱庭を制作する体験が、心理療法の中でどのような意義をもつかを論じた。異質なものと出会った時に最初に働く力動は“排除”であるが、淘汰ではなく、認めて接近し、その上で次の展開へと“弁証法的”な動きがなされることが重要であることが示唆された。

第8章では、連続する箱庭制作で見られる連続性とプロセスの心理療法としての意義を検討し、1つ1つのプロセスが箱庭の治癒的要因と繋がりうることを示した。さらに連続性を検討するために、4回の箱庭制作を行った事例を検討した。すると、初回の箱庭制作と最終回の箱庭制作の間にイメージに対するコミットが段階的に進む、何度も体験される等の治癒的な動きが生じやすくなる可能性が示された。

終章では、箱庭療法における制作者の主観的な体験と治癒的要因の関連について論じられた。異質なイメージは意識的なコントロールから外れたもので治癒的な動きと言える。しかし、異質なイメージは時に制作者を脅かす。治癒的に働くためには、適切な守りが働き、その上で心的内容に自我が向き合う必要がある。また、箱庭制作過程では三次元空間で制作者が自ら体験をおさめる、イメージとの距離を取る、逆に中に入りこむといった動きが生じるが、制作者の内的な世界をおさめる点において治癒的な動きと言える。そのような心の動きをはらむものとして連続性をもった箱庭制作は考えられ、本論文の全体のまとめとして結論付けられた。

(論文審査の結果の要旨)

Kalff, D. M.が Jung の分析心理学の理論を適用して確立した箱庭療法は、心理臨床領域のみならず、福祉・教育などの様々な領域で用いられている。本論文は、箱庭療法における制作者の主観的体験を明らかにし、その治癒的要因を検討しようとした、意欲的な論考である。本論文では、制作者の主観的体験の中での「力動」と、そこに時間的な過程を付加した「プロセス」と「連続性」の3点に着目しているところに、オリジナリティーが存在する。これによって制作者の主観的体験を明らかにし、結果として、箱庭療法の治癒的要因についての議論に一石を投じることとなった。

第1章では、箱庭療法の先行研究を概観し、「力動」と「プロセス」と「連続性」という、本研究の課題が抽出された。そのうえで本論文は、実証的なアプローチによってこれらの課題に迫っている。

箱庭療法は多くの「関係性」のなかで制作がなされ、またきわめて主観的なところの働きが生じる場である。そのなかで客観性を保つ態度でその機序を明らかにすることはたいへん困難である。さらに、より実際の臨床の場に近いような「力動」「プロセス」「連続性」という、ダイナミックなあり方を損なわないようにアプローチすることも、極めて難しいこととなる。そんななかで本研究は、この難しいアプローチをとり続けたことは、高く評価できる。そこには、調査の方法の工夫や、粘り強い調査態度が垣間見えており、著者の研究能力の高さがそこに現れていると思われる。

第2章では、作成された質問紙「自我と箱庭イメージの関係性尺度」から「親和性」と「異質性」の2因子が抽出された。箱庭と制作者との間の「距離」について数量的に明らかにされたことは、興味深い結果である。

また第4章～第6章では、3回の箱庭制作を行う調査研究が実施された結果、1回から3回の箱庭制作の間の変化には、異なった3パターンの群が抽出された。またインタビュー調査では、それら3群の主観的な体験についても検討が加えられ、2回目では「1回目の箱庭と同じものを作りたくない」という気持ちや「気が楽になった」という制作者の主観的な変化が制作に影響を与えていたり、3回目では、半数以上の制作者がイメージを決めてから制作し始めるなど、イメージの体験の違いが見られることなどが明らかにされた。これまで、一回限りの箱庭制作が検討の対象になることが多かった箱庭療法研究のなかで、このように、より臨床場面に近い形で調査検討が行われたことも意義深いと考えられる。

その後本論文では、箱庭制作で見られる連続性とプロセスについて、心理療法としての意義を検討し、箱庭療法における制作者の主観的体験と治癒的要因の関連についても論じられている。

試問においては、箱庭制作に関わる「語り」の分析だけではなく、箱庭作品や制作態度といった、より客観的な指標へのアプローチも有効であったのではないかという指摘がなされた。

しかし、これらの指摘は本論文のさらなる発展を期待するものであり、その価値を下げるものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和2年2月13日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、（期間未定）当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：_____年_____月_____日以降